

企業家的競争の様式とその帰結について

: entrepreneurship の所在とその特徴をめぐって

北海道大学大学院経済学研究科
経済システム専攻 博士課程
吉田昌幸
cav82310@pop21.odn.ne.jp

0. はじめに

「企業家性 entrepreneurship」の所在とその特徴をめぐる議論は、第一に経済システムの特徴に対して、第二に経済分析の特徴に対して重要な論点を提示する。様々な企業家論の中からこれらの論点を、そこで用意されている回答とともに提示することで、企業家論の現状とその可能性を探ることは、企業家論の課題のひとつである。このような課題に当たって、様々な企業家論を学説史として検討することが必要となる。われわれは、その先行例としてヘバートとリンク[1982]や池本[2004]などを挙げることができる。そこでは様々な論者により企業家活動の定義が多様であることが示され、これら多様な企業家活動を類型化することで企業家論の全体像を探る試みがなされている。しかし、企業家活動の多様性は示されてはいても、それらの多様な定義から企業家論全体の特徴をとらえることについては必ずしも成功しているとは言えない。

この原因は、第一に企業家活動を「企業家という特殊な個人のなすこと」としてとらえようとする点にある。つまり、多様な企業家論を検討していく上で、企業家活動が多様であるのはそれぞれに対応した企業家という特殊な個人が多様に存在するからであるという、企業家と企業家活動の一对対応を暗に想定している。しかし、本報告で取り上げるカーズナーの議論ⁱⁱからは、シュンペーターやナイトが定義する企業家活動を遂行する上で必要不可欠な能力に企業家性を位置づけることが可能であるし、それこそが重要であるという論点が導かれる。つまり、多様な企業家活動を遂行する能力に企業家性の所在を見いだすことにより、同じ企業家が様々な企業家活動を遂行するといふ一对多対応の関係として議論できることが示されている。またヴェブレンの議論からは企業家活動が継起的に生じることは「企業家という特殊な個人」の存在を示すものではなく、そのような活動が促進される制度的背景の存在を意味する。つまり、企業家の定義の多様性は「企業家的」という形容詞を個人に対してだけではなく、特定の経済活動を遂行するに当たって不可欠な能力やそれに付随する活動に対して、さらに経済システムの制度的背景に対して用いることが可能であることを意味する。このように考えれば、企業家論とは企業家という特殊な人格の類型学ではなく、経済システムの企業家性を問う議論である。学説史として様々な企業家論を並列的に検討することによって示さなければならないのはこの点である。

本報告では、様々な企業家論によって提示される企業家的競争についての議論から、経済システムにおける企業家性の所在とその意味について考察する。企業家活動の定義同様に企業家的競争の様式やそれによってもたらされるものに関する分析も多様である。そこで、具体的には、各論者による企業家的競争の様式の特徴を、その後それぞれの議論から企業家的競争によってもたらされものについてまとめる。これらの議論を通じて競争的環境という側面から企業家性の所在とその特徴について検討する。

1. 企業家的競争の様式

企業家的競争とは何か。この問いに対して最も明確に回答を用意しているのは、「企業家性 (entrepreneurship) と競争性 (competitiveness) とは同じコインの裏と表である」[Kirzner1973:94] とするカーズナーの議論であろう。カーズナーは自らの議論の特徴を示す上でシュンペーターの議論との対比ⁱⁱⁱを試みている。彼によれば自らの議論では企業家活動は市場を均衡化させるものとして位置づけているが、シュンペーターの議論ではそれは市場を不均衡化させる。このような対

比はカーズナーが様々な企業家活動を遂行するに当たって共通して機敏性という能力が必要であることを示すための議論のひとつである。

それでは、両者の議論をカーズナーとは異なる視点から見たらどうだろうか。第一に、シュンペーターの議論がイノベーションを遂行する個人、カーズナーは利潤機会に対して誰よりも先に着手する能力を持つ個人として企業家を位置づけている点で企業家の定義は異なるが、企業家的競争を分析する上でこのような個人から始める方法論的個人主義を採用している点では完全競争論とも共通している。ただし、両者の議論は共に完全競争論に対して批判的である点で共通している。シュンペーターは「完全競争が現在においても過去にいかなる時代においても決して現実的でなかったことはきわめて明白である」[Schumpeter1942=1995:81,127 頁]と述べるし、カーズナーは「完全競争均衡モデルは二つの困難に苦しんでいる。それらはモデルの前提における**非現実的な性質**とから生じる困難と、現実世界を理解するための説明枠組みとしてモデルが負う**内的矛盾**から生じる困難である(強調原著)」[Kirzner1997=2001:22,30-31 頁]とする。両者とも、完全競争論は第一に分析すべき現実の経済現象を対象としていないし、第二にそれを対象として扱えない枠組みになっていることを指摘している^{iv}。シュンペーターによれば完全競争の下では「**特別の機能も特別の所得ももたない、利益も損失も受けない企業家**」

[Schumpeter1926=1977:(上)115 頁]が存在するのみであるし、カーズナーから見れば完全競争均衡下では企業家的能力を発揮する余地は無い。このように、両者ともいかなる意味での企業家性も入り込む余地が無い完全競争論に換えて企業家的競争論を展開することになる。

このような形で批判される完全競争論とは、プライステイカーの最大化主体、一物一価、完全情報、完全知識、参入退出の自由等の条件下での均衡分析を意味する。競争の前提が完全であれば市場均衡が効率的であり、その条件が不完全な独占や寡占は市場の効率性を損ねるものとして位置づけられている。カーズナーはこのような競争均衡論を「市場の至るところで情報が完全で各財・サービスの買い手と売り手の数が無限大という理想型に市場状況が近づくことによって、競争が完全に近づいていく」[Kirzner1997:47]ものとしてとらえ、それに対する企業家的競争において重要なのは競争の前提ではなく「**ありうる市場への参入の自由**である(強調原著)」[Kirzner1997:47]とする。カーズナーにとって企業家的競争の恩恵は消費者のニーズをより良く満たす方法が開発されていく点にある^v。そのためにはこのような消費者のニーズを利潤機会としてだれよりも早く発見する機敏性という企業家的な能力が必要であるし、市場競争においてもまたこの能力が活かされるような環境でなければならない。企業家的競争において参入の自由が重要であるのにはこのような理由がある。

したがって、唯一の資源所有者という立場を利用することによって得られた利潤は競争均衡分析では独占的レントという解釈がなされることになるが、もし過去の企業家的な意思決定の結果でそのような立場に至ったのであればそれは企業家利潤として解釈することができる。つまり、唯一の供給者としての独占それ自体は企業家的競争がもたらす恩恵を妨げる原因とはならない。企業家的競争環境下では、常にありうる利潤機会に対して機敏でなければならないのであって、それは独占的供給者であろうとも同様だからである。

これに対して、シュンペーターは企業家的競争をカーズナーとは異なる側面からとらえる。彼によれば「把握すべき本質的な点は、資本主義を取り扱っている際にわれわれが進化的な過程を取り扱っているということである」[Schumpeter1942=1995:82,129 頁]。企業家的競争は、「資本主義的企業の創造にかかる新消費財、新生産方法ないし新輸送方法、新市場、新産業組織形態」[ibid.:83,129 頁]によってもたらされるのであり、そのような企業家的競争を分析するに当たって、企業家活動の既存企業に対する利潤や生産量の影響だけでは不十分であり、既存企業の存続問題に対する影響にまで分析対象を広げていく必要がある。なぜなら、カーズナーとは異なり、企業家活動の遂行はそれ自体で利潤を確保することにはならない。それには既存企業との競争が必ず伴うからである。したがって、企業家的競争は、自らが進んでそのような環境下に入る企業家活動の遂行者以外はこの競争的環境へと強制的に組み込まれる形ではじまる。資本主義の下では常にこのような競争にさらされることになり、そのような競争環境は「長期的視野を著しく縮小せ

しめ、かつまた生産量を制限することによってすでに確立されている地位を保持し、そこから得られる利潤を極大化せんとしなされる行動の重要性を減少せしめる」

[Schumpeter1942=1995:87,135 頁]。すなわち、生産量を制限する独占的戦略の最大化戦略に対する優位性が現われる。このような制限的戦略は独占市場の静態的分析においては「ただ買手の負担で利潤を増大せしむる結果をもたらすのみ」[ibid.:87,135 頁]であるが、企業家的競争の下では「制限的行動はわが乗る舟を堅固にし、当座の困難を緩和させるのに多大な貢献をなしとげうる」[ibid.:87,136 頁]有効な戦略となるからである。

以上から、両者が検討する企業家的競争においては、「競争か独占か」は問題ではない。なぜなら「独占も競争的」だからである。ただし、両者の議論は必ずしも同じ側面から企業家的競争を分析しているわけではない。カーズナーの議論が独占であろうがなかろうが競争的環境の下では機敏性という企業家的能力が必須であることが示されている一方で、シュンペーターの議論では企業家活動は意図するしないに関わらず企業家競争的環境を作り出してしまい、既存の企業はこの競争環境下に否応なくさらされるので独占的戦略をとるようになるということを示しているからである。

2. 企業家的競争の帰結とは？

カーズナー、シュンペーターともに企業家的な競争環境は第一に個人の企業家性に起因する。シュンペーターにとってはイノベーションに着手し遂行する個人は企業家的でなければならないし、カーズナーにとっては市場競争が機能するには経済主体は企業家的能力を持たなければならない。具体的な経済活動の様式は異なるけれども、どちらともその活動には既存の慣行(カーズナーの場合は既知の利潤機会に対応する経済資源の活用、シュンペーターの場合は既存の生産技術に基づく経済資源の活用)に変化をもたらすという外部効果を持つ点で共通しており、これは企業家的であることのひとつの要点とすることができる⁹⁾。唯一の違いはそれをもたらすものが市場を通じた消費者の需要なのかそれとも商品生産のイノベーションをもたらす発明や発見なのかである。ここからカーズナーの企業家活動は市場における需要によって促される一方でシュンペーターの企業家活動は市場外の発明や発見に端を発するという点で異なるとは言える。しかし、企業家的競争は市場のみによって形成されるわけではなく、市場・慣習・制度の三つの組み合わせによって形成されるものであって、単に自由競争という市場の前提から形成されるものではない。企業家的競争はこの意味でも完全競争論とは異なるのである。

ここでもう一つ確認すべきことがある。それは企業家的競争の存続という問題である。J.M.クラーク[1961]によれば、市場競争が有害な結果¹⁰⁾をもたらさないためには競争環境それ自体の継続が重要である。シュンペーターは企業家的競争環境が次のような過程を経て個人の企業家性の重要性を低下させるような慣習や制度を形成するようになるとする議論を展開する。第一に、資本主義の台頭により「経済領域で自己の成果によって立つ新しい階級のための社会領域を作り出すことによって、その領域へと強い意志と優れた知能を引きつける」[Schumpeter1942=1995:124,194 頁]ようになる。この社会領域は企業家的競争環境として位置づけることができ、企業家的成功は多くの頭脳を引きつけることになり、それは人間行為全般の合理化の推進力となる。このような企業家的競争では、「慣行の起動を乗り越えて信念を持って行動」[ibid.:132,207 頁]する上で企業家性が個人の経済活動に求められる。なぜなら、当初において新商品の生産や新生産方法の導入などは「万人周知の日常的業務のらち外にあり、社会環境が新しい仕事に資金を融通したり新しい品物を買ったりするのを拒否する」[ibid.:132,206-07 頁]という抵抗が生じるからである。個人の企業家性はこのような日常的業務から逸脱する上で発揮されるだけでなく、日常的業務よりもよい方法が常に存在しうる事実を周知の事実とさせる外部効果を持つ。シュンペーターによれば、このような企業家的競争は最終的に個人の企業家性を必要としなくなる。なぜなら、「慣れた日常的業務のらち外にある仕事をなすことが昔よりはるかにたやすくなる」[ibid.:132,207 頁]し、「新しいというだけの理由で消費者や生産者が新しい種類の事物に対してなす抵抗」[ibid.:133,207-08 頁]が無くなるからである。結果として「経済進歩は非人格化され自動化される」

[ibid.:133,208 頁]ことになる。このように、シュンペーターの議論においては企業家的競争それ自体が人々の思考様式や行動様式を変化させること、そしてその変化が企業家的競争をも変質させることが示されている^{viii}。

このような視点はヴェブレンの議論にも含まれている。彼によれば資本主義は機械過程と営利原則という相反する二つの原則の混成体である。機械過程はあらゆるものに対して標準化という規律を求め^x、産業の効率化^xをもたらす。その一方で「産業体制は金銭的目的のために、営利原則によって組織される。その中心に立つのが実業家である」[Veblen1904=1965:45,38 頁]。資本主義の下での企業家活動もまたその目的を営利原則によって、その手段を機械過程によって獲得するという二つの原則の混成体である。

ヴェブレンの議論の特徴は企業家的競争を通じてつぎのような制度的な背景の変化が生じることにある。すなわち、産業の効率化の過程で、機械過程は物理的な機械設備だけではなく労働者の知能的な動作をも包含しそれらを規格・標準化していくようになる。それによって労働者はその生活習慣や思考習慣の中で原因と結果の継起の規則性を身に付けていくことになる。それは既存の制度に対しても及ぶことになり、「いろいろな程度の高めかきと権威性をもつ制度的遺産を分解せしめる作用を持つ」[ibid.:374,296 頁]ことにつながる。企業家活動の目的を形成する営利原則は既存の制度である自然権に依拠するものであり、「行動の標準化や、量的正確さを基準とする知識の標準化を強要し、また物質的因果関係を基準として諸事実を理解し説明する習慣を教える」[ibid.:66-67,55 頁]機械過程にやがて浸食されていく。結果として、「機械制度の自由な成長とともに、営利原則はまもなく衰退に陥る」[ibid.:375,297 頁]つまり、企業家的競争はその結果として企業家活動を衰退させるという視点をヴェブレンは提示している。

「企業家活動はつねに競争的であり、競争活動はつねに(ロビンス的といふより)兎むしろ)企業家的である」[Kirzner1973:94]とするカーズナーの議論に対して、シュンペーターやヴェブレンの議論は企業家性が単に個人の属性としてではなく、競争環境の下での思考様式や社会制度の変化をもたらすものとしても位置づけられている。これは思考習慣や社会制度と切り離れた市場分析としての完全競争論とは異なり、企業家的競争論の存在理由を市場・慣習・制度の動態の中に企業家性の所在を認めうることを示唆している。

3. おわりに

本報告では企業家的競争という視点から主にカーズナーとシュンペーターの議論の特徴を見てきた。これらの議論を通じてわかったことは何か。最後にヘバートとリンクにおける議論との対比から考察を試みる。彼らは過去の様々な企業家論全体の特徴を次のように要約する^{xi}。第一の特徴は、生産活動の主要な動機付けを社会的といふより個人的なものとして見なし、そのような生産活動がどのような重要な機能を果たすのかという側面で企業家をとらえることにある。そこでのキーワードは、経済変化をもたらす原因としてのイノベーションと経済変化の結果として生じる不確実性である。企業家活動は経済変化の原因とその結果の両方の側面で重要な役割を果たすことになるからである。第二に、その知覚力、創造力、判断力といったものから企業家を特徴づけ、これが経済変化の原動力となる点で経営者や資本家とは異なる位置づけを企業家に認める。第三に、しかしながら経済における企業家の役割と本質に関する歴史的な記録は一様ではない。その原因は、企業家が長い歴史の中で多様な顔をもち様々な役割を演じてきたことに由来する。

ヘバートとリンクによればカーズナーは経済変化への適応に、シュンペーターは経済変化のイニシアチヴとして企業家活動をとらえているが、前者はなぜ経済変化が生じるのか、後者は不確実性という要因を重視していない点で狭い見解であるとしている。しかし、我々の議論を通じてわかったことは、企業家活動はその活動それ自体を取り上げて議論するといふより市場・慣習・制度の動態の中で議論することが必要だということである。カーズナーの議論でなぜ経済変化が生じるのかという問題は経済主体の無知ということに回答がありそれは市場競争の存在理由にもつながる。一方、シュンペーターによれば企業家活動をする上で「必要とする具体的財貨を自分の支配下に置くことができるようにする梯子」[ibid.]としての資本は必要不可欠である。不確実性は

「新しい目的のために財貨を処分する手段、あるいは生産に新しい方向を指令する手段」
[Schumpeter1926=1977:(上)116,291 頁]としての資本の方向性を決定する資本家の担う役割であり、資本主義の動態を分析する上で企業家とともに重要な役割を持つ。このようにカーズナーもシュンペーターも他の社会制度から切り離して企業家について議論することはできない。

このように考えれば、創造力や判断力をもつということは企業家であることの必要条件に過ぎず、それ自体は企業家の定義としては不十分であることがわかる。また、企業家の定義自体が機敏性といった企業家活動を遂行する能力、イノベーションといった経済活動、リスク・不確実性の請負といった経済主体が担う機能というように、さまざまなレベルからなされているという事実は、企業家の役割と本質は単に個人の属性として存在するのではなく、経済システムの様々な階層（個人、組織、慣習、制度等）の中に存在することを示唆する。企業家的競争論は、企業家の役割と本質は長い歴史の中で共通する個人の企業家性を抽出するアプローチではなく、経済システムの諸階層の動態の中に企業家性を見いだしていくアプローチを提示する。

【参考文献】

- Clark J.M.[1961]Competition as a Dynamic Process, The Brookings Institution(岸本誠二郎監修 [1970]『有効競争の理論』日本生産性本部)
- Harper D.A.[1996] Entrepreneurship and the Market Process : an enquiry into the growth of knowledge, London: Routledge
- Hebert R. and Link A.[1982]The Entrepreneur(池本正純・宮本光晴訳[1984]『企業者論の系譜』ホルト・サウンダース)
- 池本正純[2004]『企業家とはなにか: 市場経済と企業家機能』八千代出版
- 井上義朗[1999]『エヴォルーションナリー・エコノミクス』有斐閣
- Jakee K. and Spong H.[2003] 'Praxeology, Entrepreneurship and the Market Process: a Review of Kirzner 's Contribution ', Journal of the History of Economic Thought, vol.25.no.4, pp461-86
- Kirzner[1973]Competition and Entrepreneurship,the University of Chicago Press
- Kirzner ed.[1982]Method,Process, and Austrian Economics: essays in honor of Ludwig von Mises,Lexington Books
- Kirzner[1992]The Meaning of Market Process: essays in the development of Austrian Economics,Routledge
- Kirzner[1997]How Markets Work: disequilibrium, entrepreneurship and discovery,the Institute of Economic Affairs(西岡・谷村訳[2001]『企業家と市場とは何か』日本経済評論社)
- Knight F.H.[1921] Risk, Uncertainty and Profit, Beard Books([1921=1959] 奥隅栄喜訳『危険・不確実性および利潤』文雅堂銀行研究社)
- O'Driscoll G.P., Jr. and Rizzo M.J.[1996] The economics of time and ignorance, London and New York: Routledge(橋本努・井上匡子・橋本千津子訳 [1996=1999]『時間と無知の経済学: ネオ・オーストリア学派宣言』勁草書房)
- 尾近裕幸・橋本努編[2003]『オーストリア学派の経済学: 体系的序説』日本経済評論社
- Schumpeter J.A. [1934]The Theory of Economic Development : an inquiry into profit, capital, credit, interest and the business cycle, Harvard University Press(reprinted in 1982)([1926=1977]『経済発展の理論(上)(下)』塩野谷祐一・中山伊知郎・東畑精一訳 岩波文庫)
- Schumpeter J.A. [1942] Capitalism, Socialism and Democracy, London and New York : Routledge([1942=1995]『資本主義・社会主義・民主主義』中山伊知郎・東畑精一訳 東洋経済新報社)
- Schumpeter J.A.[1947] 'The creative response in economic history ', The Journal of Economic History,november,no.2,149-159

Schumpeter J.A.[1989] Essays ; on Entrepreneurs, Innovations, Business Cycles, and the Evolution of Capitalism, Transaction Publishers
Schumpeter J.A.[1998] 『企業家とは何か』 清成忠男編訳 東洋経済新報社
Schumpeter J.A.[1998] 『資本主義は生きのびるか』 八木紀一郎編訳 名古屋大学出版会
Swedberg R.,ed.[2000] Entrepreneurship, Oxford University Press
Vaughn K.I.[1994] Austrian Economics in America, Cambridge : Cambridge University Press(渡辺茂・中島正人訳[2000] 『オーストリア経済学：アメリカにおけるその発展』 学文社)
Veblen Th.[1898] 'Why is economics not an evolutionary science?', The Quarterly Journal of Economics, 373-397
Veblen Th.[1904]The Theory of Business Enterprise(小原敬士訳[1965] 『企業の理論』 勁草書房)

ⁱ 企業家活動の類型としては大きく分ければ、(1) 生産者と消費者との間を媒介し、そこから利益を獲得する商業活動、(2) 事業に伴うリスクないし不確実性を自ら請負い遂行し、それによって発生するリスクないし不確実性に対処する活動、(3)さまざまな発明や発見を商品化あるいは生産技術化していく活動、(4)企業組織を管理・経営する活動、が示されている。

ⁱⁱ Kirzner[1973]ch.2

ⁱⁱⁱ Kirzner[1973]pp79-81 参照

^{iv} 他には、ナイトは Knight[1921]第三部において、完全競争論では不確実性の所在を見いだすことができない点に問題点を見いだしている。

^v 「市場過程は動態的な競争により動かされる発見の過程であり、新旧両方の市場への企業家的参入が妨げられない制度的枠組みによって可能となる。資本主義的市場経済が示す成功というのは、非効率的で非創造的な生産活動の経路が消費者の必要を満たす新たに発見されたより優れた方法(より良い財を生産すること、あるいははまだ知られていないが存在する資源供給源の強みを利用すること)によって置き換えられなければならない強力な傾向の結果である」

[Kirzner1997:31]。

^{vi} ここからわれわれは事業を請け負う請負人(undertaker)との違いを見ることができる。請負人の活動はこのような外部効果を伴わないからである。

^{vii} 有害な結果とは次のことを意味する。「企業家利潤を上げるために、略奪的あるいは不誠実な戦術を用いたり、あるいは製品の品質を切り下げることによって、消費者、労働者または第三者の安全または健康を危うくしあるいは他の点で労働条件を損ねたり、あるいは置換不能な自然資源を浪費したりあるいは生産工場が周囲の諸価値に与える衝撃を無視して地域社会を退廃させたりするかもしれない」 [Clark1961=1970:65,65 頁]

^{viii}ただし、われわれはシュンペーターの議論すべてを受け容れるわけではない。確かに、企業家的競争が繰り返されることにより、新商品を生産したり新生産方法を導入することの困難や抵抗が低下することになる。だからといって、企業家活動それ自体が全く無用化するかといえばそうではないだろう。個別の新しい商品や生産方法は常に「日常的業務のらち外」にあるからである。

^{ix} 「機械過程の支配は、正確な機械的計測や調整の励行とか、生活上のあらゆる事物、目的や行動、必要物、諸便宜、娯楽などを、すべて標準単位に還元することの中に見られる」

[Veblen1904=1965:306,243 頁]

^x 効率化といっても最適化ではない。むしろ、ヴェブレンの述べる効率化とは次のように終わりのない過程である。「機械制産業のいかなる過程も自己充足的なものはない。それぞれの過程は他の過程の後にしたがったり、あるいはまたそれに先立ったりして、ひとつの無限の系列を作り出す。それぞれの過程はこの系列にはまりこみ、またその要求に対して自分自身の働きを適合させねばならない」 [Veblen1904=1965:7,9-10 頁]。

^{xi} Hebert and Link[1982]ch.9